

# 場所格の「に」「で」と述語「ある」との選択関係

佐野 まさき

## キーワード

場所、位置、個体、状況、状態、実況

## 1. はじめに

本論文は、日本語の助詞「に」と「で」の、主に場所を示す用法を見ることを通じて、これらの助詞が文法の内や外の分野とどのように関わっているかを解き明かしていくことを目的とする。助詞の選択に関しては、特に動詞といった述語の、語彙的に固有の性質と関連させることが一般的である。しかし本論では、述語に内在する語彙的性質だけでなく、意味論的、語用論／文脈的な観点からの考察が不可欠であることを、「に」と「で」の選択をいわばケーススタディとして、論じることになる。主に取り扱う構文は、「に」あるいは「で」と共起する述語として動詞「ある」が使われている構文である。

## 2. 出発点となる先行研究

場所を示す用法としての「に」と「で」の使い分けやそれに関する文献は数多くある（松村（1957: 332）、神尾（1980）、森田（1980: 322; 1989: 760-761）、山田（1981: 62）、中右（1998）、定延（2004）等）。それらは、用語上の違いを含む細部や視点の置き所などを捨象すればかなり本質的に共通する部分があるが、本論では論述の一貫性や論点の明確性が高いと思われる中右（1998）を議論を進める出発点として取り上げる。中右（1998: 8-9）は次の（1）や（2）の例を提示しながら、（3）のような一般化をしている（例文の判断は中右のものだが、コンマとピリオドはそれぞれテンとマルに改め、また中右が例文で用いている分かち書きはしないでいる）。

- (1) a. 本棚 {に／\*で} 地球儀がある。  
b. 大講堂 {\*に／で} 卒業式がある。
- (2) a. 天安門広場 {に／\*で} 自由の女神像があった。  
b. 天安門広場 {\*に／で} 大規模な騒乱があった。
- (3) 「に」と「で」の棲み分けの原理

「に」は〈個体の位置〉を合図するのに対し、「で」は〈状況の位置〉を合図する。位置の項が「に」と「で」いずれの格表示で合図されるかは、「が」格の項が〈個体〉か〈状況〉かの違いによって決まる。

すなわち、(1a)の「地球儀」や(2a)の「自由の女神像」のような〈個体〉をある場所に位置づけるのには、「本棚に」「天安門広場に」のようにその場所を「に」で表示するのに対し、(1b)の「卒業式」や(2b)の「大規模な騒乱」のような〈状況〉を位置づけるのには「大講堂で」や「天安門広場で」のように「で」で表示する、というのが(3)の「棲み分けの原理」である。〈個体〉は他の文献では多くはモノと(しばしばこのように片仮名表記で)言及されているものと考えてよい。〈状況〉については、中右(1998:8)は「状態、事態、出来事、事象、現象、行為、活動などを含む総称名として用いる」としている。これは、〈状況〉という概念は、その下位概念として〈状態〉〈事態〉〈出来事〉〈事象〉〈現象〉〈行為〉〈活動〉などを含むと理解できる。実際たとえば森田(1980,1989)では、中右の〈状況〉に当たると思われるものを、行為、作用、現象などと言及している。いずれにせよ〈状況〉は、(3)の棲み分けの原理において、位置づけの対象となる〈個体〉(モノ)と対比される別の位置づけの対象として使われており、他の文献でしばしばコトやデキゴトと言われているものに相当すると考えてよい。

さらに中右は、「に/で」格と、「ある」の述語タイプとの関係について次の(4)のように、そして「ある」の述語タイプとテンスとの関係について(5)のように述べている。(ただし中右は「述語タイプ」や「テンス」という言い方はしていない。)

(4) 「に」格をとる「ある」は〈状態〉述語なのに対し、「で」格をとる「ある」は〈過程〉述語である。[...]状態と過程は〈行為〉とともに述語の3大基本類型を形づくる [...]。

(中右(1998:9-10))

(5) 状態の「ある」は〈現在の状態〉を指し示すのに対し、過程の「ある」は〈未来の事態〉を指し示す。

(中右(1998:13))

これらを先の例文(1)に当てはめて考えると、(1a)で「に」を用いた文法文における「ある」は〈状態〉述語で〈現在の状態〉を指し示し、一方(1b)で「で」を用いた文法文の「ある」は〈過程〉述語で〈未来の事態〉を指し示すということになる。なお、「事態」は上の段落で触れたように、中右にとって〈状況〉に含まれる。(5)で過程の「ある」が〈未来の事態〉を指し示すとして、より一般的に〈未来の状況〉としていないのは、そうしてしまうと、〈状況〉が(中右にとって)「状態」も下位概念に含むので、過程の「ある」が〈未来の状態〉を指し示す場合もあることになってしまい、中右はそれを排除したかったということかもしれない。定延(2004:192)は、彼の言うデキゴト(おおむね中右の〈状況〉や他の文献でのコトに対応)は状態を含まないと明言している。

(1a)の「に」を使った文法文が〈現在の状態〉を示し、(1b)の「で」を使った文法文が〈未来の事態〉を示すことを例証するために、中右(1998:13)は、「発話者の眼前の状況を瞬間的に捉え[...]状況が現在に属するものである」ことを示す感嘆詞「ほら」と、未来時を示す「あした」のような副詞を、問題の文に共起させた次の文を提示している。(文法性の判断も中右のものだが、中右の例文の「明日」を「あした」に改めてある。)

(6) a. {ほら / \*あした} 本棚に地球儀がある。

b. {あした / \*ほら} 大講堂で卒業式がある。

ただし、これは中右では触れられていないが、「ほら」は眼前の状況を瞬間的に捉えた場合だけでなく、聞き手に向かって、(過去にすでに起こったことや、未来に起こることがすでに確定している) あることがらを思い出させるようなときにも使う。「ほら、(たしか) 来週の金曜日(だったか)に卒業式がある。そのあとで一緒に飲むのはどう?」のようにである。(丸カッコ付きで「たしか」「だったか」を入れてあるのは、例えばスケジュール表などを見て、眼前の状況(=スケジュール表の状況)を瞬間的に捉えた発話である必要はないことを保証するためである。) (6b) の「ほら」も、そのような用法に解釈すれば(もちろんそれは中右の意図しているものではないが)、それほど不自然ではない。「ほら、(あした) 大講堂で卒業式がある{よね/でしょ}」の下線部のように終助詞や助動詞などのモダリティ的表現を付ければいっそう自然になろう。) 眼前の状況を捉えた場合にしか使えない表現としては、その眼前の状況を話し手が感嘆して聞き手に見るように促す間投詞的な「見て!」のようなものがある。これを使って確かめてみると、たしかに(6a)の「ほら」を「見て!」で置き換えて下の(7a)のようにしても文法性は保たれ、一方(6b)の「ほら」を「見て!」で置き換えて(7b)のようにしても、眼前の状況を捉えて使う場合の「ほら」同様、許容不可能である。

- (7) a. 見て! 本棚に地球儀がある。  
 b. \*見て! 大講堂で卒業式がある。

念のため、「あった」とタ形になっている(2)をル形の「ある」にして確認してみると、次のように予想通りの結果となる。

- (8) a. {見て/ \*あした}、天安門広場に自由の女神像がある。  
 b. {あした/ \*見て}、天安門広場で大規模な騒乱がある。

もちろん(8b)の「あした」は未来時を示すといっても、その未来時に起こる「大規模な騒動」は(6b)の「卒業式」のような場合と違ってスケジュール上決定済みのようなものではないのが普通であるから、話者の予想や、場合によっては予言のようなやや特殊な意味合いを帯びることになる。したがって、「あした」を使った(8b)では、「あした」を使って断定できる(6b)とは違って、たとえば「だろう」のような推量を表すモダリティ的表現を追加するほうが実際には使われやすいだろう。(これに関してはあとでも何回か確認する。) しかしいずれにせよ、眼前の状況を捉える「見て」と未来時を示す「あした」との共起可能性に関して(8a)と(8b)の対比は明確である。

### 3. 問題となる例

今まで見てきた例文は、基本的な鋳型として次のような構文型をしている。

- (9) Y {ニ/デ} X ガ アル  
 (ただし Y は場所を指示する名詞句、X は〈個体〉または〈状況〉を指示する名詞句)

以下、便宜上 (9) の形式をした構文を「場所アル構文」と呼ぶことにする。(1)(2) のような場所アル構文では、たしかに中右の (3) が予測するような「に」と「で」の棲み分けができていているように見える。しかし、(9) の特に X の部分をいろいろに変えてみると、事情はそれほど簡単ではない。特に X に来るのが、天候などの自然現象にかかわる表現である場合が問題になる。

まず、次の例を見てみよう。

- (10) a. きノウ京都に雷雨があった。  
b. きノウ京都で雷雨があった。

すぐに分かるように、ここでは同じ「雷雨」を京都という場所に位置づけるのに、その場所に対して (10a) のように「に」を用いても (10b) のように「で」を用いてもどちらも自然である。(3) の「棲み分けの原理」が予測するような「に」と「で」の棲み分けがなされていないように見える。(3) を維持するために、(10a) の「雷雨」は〈個体〉扱いされ、(10b) の「雷雨」は〈状況〉扱いされているというようにすることはできるだろうか。たしかに、表現上は同一のものが、解釈上〈個体〉になったり〈状況〉になったりすることはある。例えば次のような例に見られる「舞台」がそうである。

- (11) a. あのビルの屋上に舞台がある。  
b. あのビルの屋上で舞台がある。

(11a) と (11b) は、「舞台」という見かけ上は同一の表現を「あのビルの屋上」という場所に位置づけるのに使われている助詞が「に」と「で」で違うだけであるが、それに伴って、「舞台」そのものおよび文全体の最も自然な解釈が全く異なっている。すなわち (11a) では、「舞台」が、演劇や舞踊などの芸能を演じる場所として設置された、物理的な「もの」として解され、それがビルの屋上にある（存在する）と解される。それに対し (11b) では、「舞台」が、典型的にはそのような物理的な設置物の上で行われる、演劇や舞踊といった「活動」として解され、それがビルの屋上である（行われる）と解される。そしてこのことは、(11a) の「舞台」が (3) で言う〈個体〉であり、(11b) の「舞台」が、(活動を一種として含む)〈状況〉であるならば、(3) の「に」と「で」の棲み分けの原理通りの結果である。さらにこれが (4)(5) と連動して、(11a) は〈現在の状態〉を述べる文になり、(11b) は〈未来の事態〉を述べる文になるはずであるが、事実その通りであることは、次のような例で確かめられる。

- (12) a. {見て／\*あした}、あのビルの屋上に舞台がある。  
b. {あした／\*見て}、あのビルの屋上で舞台がある。

もとに戻って (10) を見てみると、ここでの「雷雨」は (10a) のように「京都に」の時は〈個体〉であり、(10b) のように「京都で」の時は〈状況〉であるとするには無理がある。そもそも概念的な点からして、「雷雨」は、例えば「雷に伴って空から激しく落ちてくる水滴/雨水」のような、〈個体〉と解釈することはできない。たとえ〈個体〉を、物質の三態である「個体」「液体」「気体」

だけでなく、中右 (1998: 10) の例「若者には戦争体験がない」(「ない」は「ある」の否定形) に見られる「戦争体験」のような抽象的なものをも含めた広い概念としても(そしてそれが今の「戦争体験」の例からも明らかのように中右の意図であるが)、「雷雨」を〈個体〉と解釈すると文法的な不整合が生じる。例えば「舞台」が〈個体〉でありうるがゆえに「舞台を取り壊す」と言うことができるのと同様、「水滴」「雨水」についても、それらが液体という〈個体〉であるがゆえに「{水滴/雨水}を拭き取る」と言うことには何の問題もない。ところが「雷雨」について「雷雨を拭き取る」などと言うのは何のことか分からないか、少なくとも(動詞「拭き取る」は補部に〈個体〉を選択するといった)選択制限の違反を起こした逸脱表現にしかならない。「雷雨」は、それを位置づける助詞が(10a)のように「に」であろうと(10b)のように「で」であろうと、あるいはそれ以外のいかなる場合でも、少なくとも概念上は、雷に伴って雨が降ることという、出来事や自然現象を含むコトのことであり、明らかに(3)で言う〈状況〉である。(中右は「活動」同様、「出来事」や「現象」も〈状況〉に含めていることを想起されたい。)

さらに、(10)の「あった」を「ある」にして、それとともに「きのう」を「あした」にすると、次のように未来を表す文が得られる。

- (13) a. あした京都に雷雨がある。  
b. あした京都で雷雨がある。

(13a)(13b)ともに「あした」が使えるということは、「に」か「で」かの選択に関わらず未来を表すことができるということである。もちろん、「あした」を使った(8b)についてその下で述べたのと同様に、「あした」を使った(13)は予想を述べることになるので、断定を避けて推量の「だろう」のようなモダリティ表現を付け加えることが実際は多いということはある。しかし重要なことは、たとえそのような表現がある場合でも、このように〈個体〉とは言えない「雷雨」が「ある」の「が」格項になっている場合は、明らかに〈個体〉であるものが「ある」の「が」格項になっている場合と、(5)を思わせるような時間的対立を見せるということである。次のような例である。

- (14) a. 京都 {に/で} 雷雨があるだろう。  
b. 京都に呉服屋がたくさんあるだろう。

「雷雨」が「ある」の「が」格項になっている(14a)は、「雷雨」を「京都」という場所に位置づけている助詞が「に」であっても「で」であっても、「だろう」によって推測しているのは未来のことと解釈するのが自然である。対して、「呉服屋」という〈個体〉が「が」格項になっている(14b)は、「だろう」を(14a)と同様に推測として解釈しても、それは未来ではなく現在のことに對する推測と解釈するのが自然である。すなわち、「だろう」によって、(14a)では未来の雷雨の発生を推測し、(14b)では現在の呉服屋の存在を推測しているのである。このような推量の「だろう」は下降調で読まれることに注意されたい。もし(14b)で「だろう」を上昇調で読むと推量ではなく、聞き手に確認や念押しをするような、いわゆる確認要求の「だろう」になる。「君は学生だろう？ だったらもっと勉強しなきゃ。」などと同様の用法である。(庵(2012: 179-180) およびそこで言及されている文献を参照。)しかしその場合も、やはり(14b)では現在のことに對して、それを確認要求していること

になる。確認要求の「だろう」自体は、確認可能なことであれば、現在のことだけでなく未来のことについても、「君も来るだろう？」のように使えることに注意されたい。ところが(14a)では、「だろう」を上昇調で読んで確認要求の解釈を強制すると不自然になる。それはまさに人間の力の及ばない未来の自然現象という、不確定で予想の域を出ない対象に対して、確認をしていることになってしまうからである。(念のため付け添えるが、予想の対象(内容)は確認の対象とはなれなくても、予想自体は確認の対象になりうる。例えば「(京都 {に/で}) 雷雨がありそうだろうか？」のように、「雷雨がありそう(だ)」という予想そのものに対して、確認要求する上昇調の「だろう」を付加することは可能である。)

ついでながら、「(あした) 大講堂で卒業式がある」のような場合は、次の例のように「だろう」を後続させると、下降調の推量用法と上昇調の確認要求用法との自然らしさが(14a)の場合と逆になる。

(15) (あした) 大講堂で卒業式があるだろう。

卒業式などの、スケジュール的にあらかじめ確定されるのが通例である年中行事のようなもの場合は、たとえそれが未来のことであっても、推量の「だろう」を付け加えなければならぬほどの不確実さを話者が抱くことは、よほどその話者がそのような行事とは関わりの薄い外部の人間でない限り、まずないと言ってよい。したがって(15)の「だろう」を下降調の推量用法で使う状況は(14a)に比べてはるかに限られることになる。一方(15)の「だろう」を上昇調にして、話者が聞き手にスケジュール上の確定事項の確認要求をするのはじゅうぶんありうることである。なお、このようなスケジュール的に確定している未来は、Leechが英語の単純現在時制で未来を表す用法を特徴づけた、FUTURE AS FACT (Leech 1987: 65) や FUTURE ASSUMED TO BE FACT (Leech 2004: 65) に通ずるものである。

例(10)や(13)が、「で」だけでなく「に」も〈状況の位置〉を合図することを示しているのであれば、次の問題を考えなければならない。

(16) 「に」が〈状況の位置〉を表す場合の〈状況〉は、「で」が〈状況の位置〉を表す場合の〈状況〉と同じものか違うものか。違うのであれば、どう違うか。

もしこの問題の前半部に対する答えが「同じ」ということなら、「に」と「で」の棲み分けのない部分があることになり、その部分は言語の経済性に反することになる。もし前半部の答えが「違う」ということなら、後半部の問いに答えなければならない。この後半の問いの答えを予想すると、もし〈状況〉が、中右のように〈状態〉〈事態〉〈出来事〉〈事象〉〈現象〉〈行為〉〈活動〉などの総称、すなわち上位概念であるとするれば、その上位概念を構成するこれら下位概念のどれを位置づけるかで「に」と「で」は異なってくるということになるだろう。本稿ではこれに深入りする余裕はないが、次の節では、「で」しか使えない場合について、さらに次の節では「に」が使えない理由について、考察する。

## 4. 未来を表さない「で」格場所アル構文

まず (7) などで見た、眼前の状況を話し手が感嘆して聞き手に見るように促す間投詞的な「見て！」を (13) の「あした」に取って代えた次の例を考えてみよう。

- (17) a. \*見て！ 京都に雷雨がある。  
b. 見て！ 京都で雷雨がある。

(17a) にだけ非文を示すアスタリスクを付けてあるが、特に文脈を指定されずに出されたら、(17a) も (17b) もともに不自然だと感ぜられるだろう。しかし、例えばテレビで日本各地の様子が、6 分割ごとの同時画面で映し出される状況を考えてみよう。6 分割の画面のうちの 1 つが京都で、その京都は雷雨、他に同時に映し出されている 5 つの地域（例えば札幌、仙台、東京、名古屋、広島）はどこも晴れだったとする。これをコンテキスト A としよう。このような 6 分割画面を見た話し手は、テレビに目をやっていたいなかった聞き手に対し、「京都で」を使った (17b) を発話することができると思われる。しかし (17a) のように「京都に」とは言いにくいだろう。判断の程度は人によって差はあるかもしれないが、このコンテキスト A でどちらが使いやすいかと問われれば、(17a) より (17b) のほうであって、少なくともその逆ではないと思われる。「に」の (17a) が使いにくいのはあとで考えることにして、(17b) が（コンテキスト A で）使えるのは、一般にル形の非状態文が、眼前の事態を瞬間的に捉えて聞き手に伝える「実況放送文」として使われることがあるのを想起させる。すなわち、(17b) が許容される状況は、次のような非状態動詞のル形／現在形の文が使われる状況と共通するということである。（英語の例は筆者のものであるが、類例については Leech (1987: 6f.), Leech (2004: 7f.) 等を参照。）

- (18) a. イチローが二塁に走る！  
b. Ichiro runs to second base!

(18a) の日本語も (18b) の英語も、野球の実況放送で、イチロー選手が、盗塁などで二塁に向かう場面を瞬間的に捉えたアナウンサーの発言として申し分ない。(17b) もこれに似て、上のコンテキスト A でのテレビの分割画面のうちの 1 つを瞬間的に捉え、あたかも実況放送をするかのごとく伝える表現として使うことが可能であると思われる。

そうすると、次のように考えれば、「で」を用いた「京都で雷雨がある」のような場所アル構文が (13b) や (14a) などでは未来を示し、上で見たコンテキスト A のような場合は (17b) のように現在のことを表す（“実況”する）ことが自然に説明できる。すなわち、「京都で雷雨がある」の「雷雨」が〈状況〉であれば、(3) により「京都」は「で」で表示され、「ある」は (4) により〈過程〉述語になる。そして〈過程〉述語を含めた〈非状態〉述語は一般に、ル形で使われると、通常は〈未来の事態〉を指し示す。(5) の後半部はそれを〈過程〉述語の「ある」に当てはめたもので、(13b) や (14a) の「で」を使った場所アル構文は未来を示すことになる。ただしル形の〈非状態〉述語は〈未来の事態〉だけでなく、実況放送的文脈では (18a) のように目の前の〈現在の事態〉を瞬間的に指し示すことができる性質を持つので、(4) で〈過程〉述語とされた「ある」も、(17b) で考え

たコンテキスト A での実況放送的文脈では、他の〈非状態〉述語同様、瞬間的な〈現在の事態〉を示すということになる。(以下、「実況(放送)」というのを、このように広い(あるいは比喩的な)意味で使い、それを示すために(「～的」のような接尾辞なしの場合は)しばしば“実況放送”のようにダブルクォートでくくって表記することにする。)

急いで付け加えなければならないのは、(17b) のような、「で」と共起するル形の場所アル構文を実況放送的に使うには、それに見合うだけの条件が課せられるということである。第一の条件として、実況放送のように取り上げる以上、その対象はすぐに目に付く、注目されるものでなければならない。(17b) が使えるコンテキストとして考えたテレビの6分割画面では、京都だけが悪天候の雷雨で、それ以外の5つの地域はどこも好天の晴れというコンテキスト A に基づいていたが、もし例えば5つの地域の札幌は快晴、仙台は曇り、東京は小雨、名古屋は大雨、広島は雹といったような、地域によって好天から悪天まで様々な天候—コンテキスト B と呼ぼう—であったなら、たとえ雷雨が京都だけであったとしても、(17b) の許容度は、コンテキスト A に比べると、京都の雷雨だけに注意が行くということがなくなる分、低くなると思われる。もちろん、雷雨の地域だけを特に探しているとか、京都の天候だけに注意しているといった、始めから雷雨以外の天候や京都以外の地域には関心がないような場合は別で、その場合はコンテキスト A と B の違いは意味をなさなくなる。そのような、始めから関心の対象が決まっているような特別な前提がある場合を除けば、(17b) は、コンテキスト A で使われた場合のほうが B の場合より許容されやすいか、少なくともその逆ではないだろう。さらに、(17b) の許容度がコンテキスト A よりいっそう上がるコンテキストも考えられる。例えばテレビで全国の天候を6分割画面ごとに映し出す時、関西地方の天候の様子はふだんは京都ではなく大阪を映し出しているとしよう。その大阪を含めた6つの地域すべてが晴れている様子が6分割画面で同時に映し出されているところを、突然大阪の画面だけが切り替わり、京都の雷雨が映し出されたとしよう。この場合—コンテキスト C としよう—は、京都の天候の注目度が最大限に上がり、それを伝える (17b) の発話は、コンテキスト A の場合よりいっそう自然なものになると思われる。要するに、コンテキスト B よりもコンテキスト A のほうが、そしてさらにコンテキスト C のほうが、京都の天候に対する注目度が高くなり、それに伴って (17b) を京都の天候の“実況放送”文として使うことが正当化されて許容度も増してくるというわけである。このような、注目度と許容度との相関性は、(17b) を、(18) と同様の“実況放送”文と特徴付けることを支持するものである。

なお、「に」を用いた (17a) については、コンテキスト A だけでなく、B や C においても、その不自然さに変わりはない。「に」が使えないことについては先に断ったように、あとで立ち返る。

今見た、“実況放送”に値する「注目度」という条件のほかに、(17b) のような場所アル構文が許容されるための別の条件もある。この第二の条件を見るために、まず次の事実を観察しておこう。場所アル構文の「が」格項にくるのが「雷雨」であれば上で示したようなテレビの分割画面の1つを捉えて発話する(“実況放送”する)のに使うことができるが、単なる「雨」や、あるいは「大雨」「激しい雨」などはどれも、たとえ注目度が高くても、次の例が示すように許容できない発話になる。

(19) \*見て！京都で {雨／大雨／激しい雨} がある。

「雨」の場合はともかく、「大雨」「激しい雨」など、非日常的で人々の生活に直接的な影響を及ぼし



うる天候であれば、“実況放送”するにじゅうぶんな注目度（あるいは情報的価値）があってもおかしくないが、これらの天候を場所アル構文の「が」格項として用いても、許容可能な“実況放送”文とはならない。重要なことに、この“実況放送”としての不自然さは、上で考えたようなコンテキストの違いに影響を受けない。すなわち、テレビの6分割画面で、京都以外の5つの地域がすべて晴れであるようなコンテキストAに準じた場合に(19)を発話しても、あるいは京都を含めた6つの地域の天候が様々であるようなコンテキストBに準じた場合に(19)を発話しても、そして京都でなく大阪を含む6つの地域がすべて晴れていて、大阪の画面だけが突然京都に切り替わったようなコンテキストCに準じた場合に(19)を発話しても、その不自然さは変わらない。例えば京都に対する注目度が最も高くなるコンテキストCに準じ、大阪から突然京都に切り替わった画面が、大雨が降っているのを映し出していたら、「見て！ 京都で大雨がある！」のように言ってもよさそうなものであるが、その許容度は(17b)の「雷雨」の例に比べたら明らかに落ちる。

この(19)が不可能で(17b)が可能である理由として、「(大)雨」は、「降る」という動詞を使って次の(20a)のように言うことができるのに対し、「雷雨」の場合は「降る」のような動詞が使えず(20b)のような言い方がないために、いわばその代替措置として場所アル構文を使った(17b)のような言い方をするのだという説明が出てくるかもしれない。

- (20) a. (見て！) 京都で {雨／大雨／激しい雨} が降っている。  
 b. (見て！) \*京都で雷雨が降っている。

これは、形態論に由来するいわゆる「阻止」(blocking)を思わせる説明である。すなわち、(19)は、(20a)のような言い方があるためにそれによって阻止されて不可能な言い方になるが、(17b)は、それを阻止する(20b)のような言い方がないために、可能な言い方になるということである。しかしこの説明は、以下と次の段落で述べる、少なくとも2つの点で説得性に欠ける。第一に、この説明においては、阻止する側と阻止される側の関係が、通常の阻止現象の場合とほとんど逆になっているという点がある。ある表現Xが別の表現Yを阻止するのは、一般にXのほうがYより特定のである場合である。英語で“How many fingers do you have?”と問うと“Ten.”という答えが得られることから分かるように、手の指はどれもfingerであるはずだが、親指を指して“Is this a finger?”と問うと、ほとんど決まって“No.”という答えが返ってくる(Hofmann・影山(1986: 11))。これは、親指を指す特定の単語、すなわちthumbがあるからであり、thumbという親指専用の語の存在が、親指のことをfingerという一般的な語(thumbの上位語)で呼ぶのを阻止しているということになる。しかし(20a)と(19)の場合は、阻止する側と見なされる(20a)の表現は、阻止される側になる(19)より、thumbの例のように使用範囲がより特定のであるとは言えない。(20a)のような文は、「見て！」があってもなくても、上で考えた“実況”に関わる3つのコンテキストA、B、Cに関係なく広い文脈で許容される。すなわち(20a)は、「見て！」があれば実況的になるが、それはコンテキストA、B、Cのような文脈に左右されず使うことができ、また「見て！」の代わりに例えば「京都で長時間 {雨／大雨／激しい雨} が降っている」のように継続時間を示す「長時間」のような表現とともに使えば、瞬間的な“実況”ではなく単に京都の(一定時間の)天候の様子を述べる記述的な文となる。「見て！」も「長時間」もなければ、文脈次第で実況的にも記述的にもなる。要するに(20a)は、「京都で(一日中)小雨が降っている」や「京都で(しばらく)雨が {降って／

続いて／降り続いて} いる」といった言い方と同様の、普通に京都の天候の様子を描写する、一般的なテイル形の文の一例にすぎない。また阻止される側になる (19) は、上の *finger* の例のように使用範囲が一般的であるどころか、「見て！」で実況的に使うのはそもそも許容されず、「見て！」を用いなければ (モダリティ表現との共起を好む) 未来を予想する文にしかならず、使用範囲は非常に限定される。したがって、(20a) と (19) を、*thumb* が *finger* の使用を阻止するような関係と同様に見なすことはできない。

上の (20) の直前直後に示したような説明の第二の問題点として、一般性がないということがあがる。そもそもこの説明は、「ある」を動詞とする場所アル構文による言い方と、「ある」以外の動詞 (上の例では「降る」) を使った言い方の、どちらか一方だけしか使えないと暗黙に一般化し、それに説明を加えようとするものである。しかしそのような一般化はそもそも成り立たない。(17b) と (20b)、および (19) と (20a) ではたしかに一方しか許容されないペアになっているが、例を広げて見ると、2種類の言い方のどちらも許容される場合も、反対にどちらも許容されない場合も、実際には存在する。例えば「稲妻」は、(20a) に対応する、「走る」という動詞を使った (21a) のような言い方が可能であるだけでなく、(21b) のような、場所アル構文による“実況”も、少なくともコンテキスト A や C に準じた場合は (17b) と同程度に可能である。

- (21) a. 見て！ 京都で稲妻が走っている。  
b. 見て！ 京都で稲妻がある。

もし (20a) のような言い方が (19) を「阻止」しているのなら、同様に (21a) が (21b) を「阻止」してもよいはずであるが、実際はそうはなっていない。また (21) とは反対に、どちらの言い方もできない場合もある。次の「豪雨」のような例がそれである。

- (22) a. (見て！) \* 京都で豪雨が降っている。  
b. \* 見て！ 京都で豪雨がある。

もし (20b) が言えないことの代替措置として (17b) を使うということであれば、(22a) のような言い方ができない代わりに (22b) が言えても良さそうであるが、実際は (22b) は、((19) と同様に) 上で見たコンテキスト A、B、C いずれにおいても無理な“実況”文である。(もちろん、「見て！」を取って、「きょう京都で豪雨がある (かもしれない)」のように、現在 (の“実況”) ではなく未来のことを言う文として使うなら許容可能である。)

以上の2つの点で、(19) が許容できない理由を (20a) のような言い方が可能であることに求めるのは、独立した動機のない、その場限りのものであると言わざるを得ない。

(21) のような言い方は、上で考えたテレビの分割画面の一つを捉えた発話としてだけでなく、例えば空を見上げた人の発話として、次の (23) のように使うこともできる。

- (23) a. 見て！ 西の空 {で／に} 稲妻が走っている。  
b. 見て！ 西の空 {で／\*に} 稲妻がある。

ただし、中括弧内に示したように、(23a) のほうは位置づけの助詞として「で」だけでなく「に」も使えるが、場所アル構文を使った (23b) のほうは (17) の場合と同様、「に」は使えない。これも、場所アル構文が、位置づけの助詞が「で」である時に限り、“実況放送”文として使えるということを示すものである。つまり、(23b) は、(17b) ほどその使用範囲が限定されるものではないとしても、「見て！」とともに実況的に使われる時は、位置づけの助詞は (17b) 同様、「に」でなく「で」になるということである。

だいぶ寄り道をしたが、場所アル構文をル形で実況放送的に使うための、「注目度」とは別の条件としてどういうものがあるかに話を戻そう。問題の構文形の「が」格項にくるのが「雨／大雨／激しい雨」だと「雷雨」（や「稲妻」）に比して際立って許容度が落ちるのは、(19) と (17b)（や (21b)）との対比からも分かるように、実況放送的〈現在の事態〉を表す場合であって、次の (24) のように〈未来の事態〉を表す場合は、このような差はなくなる。しかも位置づけの助詞として「で」だけではなく、“実況放送”ではたとえ「雷雨」でも使えなかった「に」も、みな同様に使える。

- (24) きょうの午後には、京都 {に／で} {雨／大雨／激しい雨／雷雨} がある（だろう／かもしれない）。

（このような、断定できない推測的未来を表す場合は、すでに見てきた類例同様、丸括弧内に示したような助動詞の「だろう」や「かもしれない」（あるいはそれらと共に起しうる副詞句の「おそらく」や「ひょっとして」）などのモダリティ表現があったほうが現実的には普通であるが、(14) で議論したように、同様に「だろう」があっても「が」格項にくるのが明らかな〈個体〉であるときは、未来でなく現在の推測（や確認要求）と解釈されるのが自然であるということを想起されたい。）また、〈未来の事態〉の場合は当然実況的ではないので、(24) の「が」格項にくるのが「大雨」などではなく「小雨」のような、“実況”に値する注目度があるとは言えない表現であっても何ら問題はない。

例 (24) のように〈未来の事態〉を表す場合は「(大) 雨／激しい雨」と「雷雨」とで許容度の差が出ないのに、(19) と (17b) になると差が出るのは、(17b) がまさに (18) と同様の瞬間的“実況放送”にふさわしいからこそ許容可能になるということを示している。すなわち、瞬間的“実況放送”をするのにふさわしいのは、何らかの動きや変化がある場合であって、一定の同じような状況が長く継続している（あるいは継続する可能性のある）現象の場合は、瞬間的に動きや変化を捉えるようなものではなく、瞬間的“実況放送”をする対象にはなりにくい。「雷雨」は雨が降っているさなかに雷が瞬間的断続的に起こるといった変動を伴った現象を指す表現であり、しかもその自然現象は、現実的には比較的継続時間が短いという点で、「その」場で「それ」があるうちに伝達する瞬間的“実況放送”の対象としてふさわしい。文字通りの実況放送の例である (18) が指し示しているものが、一塁から二塁への進塁という短時間の位置変化であるのと同様である。一方、単なる雨は、たとえそれが大雨であっても、雷のような変動を加えるものは、少なくとも「(大) 雨」や「激しい雨」という言語表現自体の意味には内包されておらず、また雷雨に比して長い時間継続するものなので、瞬間的に動きを捉える“実況放送”の対象としてふさわしいものではない。この、「雷雨」と「(大) 雨／激しい雨」との時間的継続性の違いは、文の意味解釈や許容度にも影響を与える。例えば次のような例を考えてみよう。

- (25) a. 一週間雷雨が続いている。  
 b. 一週間 {(大)雨／激しい雨} が続いている。

(25a) のもっとも自然な解釈は、雷雨が中断なく一週間ずっと続いているという継続的解釈ではなく、雷雨が一週間毎日あらたに起こっているという反復的解釈である。「一週間 {夕立／にわか雨} が続いている」などが、夕立やにわか雨が一週間毎日あらたに起こっていると解釈されるのと同様である。一方 (25b) は逆に、(大)雨や激しい雨が中断なく一週間継続しているという解釈が自然にでき、一週間毎日あらたに起こっているという反復的解釈は困難である。これは雷雨が、夕立やにわか雨同様、短時間で (せいぜい1～2時間、あるいは夕立やにわか雨ならもっと短い時間内に) 完了するような短い現象であるため、「一時間雷雨が続いている」なら中断のない継続と解釈できても、「一週間」だとそのような解釈が無理になるからである。それに対して「(大)雨」や「激しい雨」という表現は、例えば極端に「一年間 {(大)雨／激しい雨} が続いている」のような文においても、(現実的にそういう状況はありえないにも関わらず少なくとも文の解釈としては) 中断のない継続の解釈が、許容されるどころか義務的であるほど、継続性が強い表現である。

問題の解釈が非現実的であっても義務的に強制されるということは、「雨 (あめ)」という語自体が内包する文法的意味素性に [+継続的] のようなものがあり、それに由来する解釈であることを強く示唆する。一方「雷雨」の場合は、継続的でないことを示す [-継続的] のようなものを意味素性として持っていることになるかということ、そう即断できない部分がある。というのも、(25a) はたしかに上述のような反復的解釈が自然にできるが、雷雨が一週間中断なく継続しているという解釈も、非現実的ではあっても、言語的には不可能ではないからである。すなわち、「雷雨」という語自体は、その文法的意味として [-継続的] のような素性は持っていない、単に雷雨は通例短時間で終わるといふ言語外的な経験や知識に照らし合わせて我々が (25a) に対して継続的ではなく反復的な解釈をすすにすぎず、継続的解釈はたまたまそのような知識経験に合わないだけであるということが考えられる。いずれにせよはっきり言えるのは、「(大)雨」は、「雷雨」が持たない継続性を、[+継続的] のような文法的意味素性の形で持っているということである。このことから、次のような対比も自然に説明できる。

- (26) a. このところ、毎日雷雨が続いている。  
 b. ??このところ、毎日 {(大)雨／激しい雨} が続いている。

「毎日」というのは、日を一日ごとに区切って見ていく表現（「毎日」の「毎」は「日毎」の「毎 (ごと)」と同じ）であるから、それと「続いている」が共起すると反復的解釈が強制される。この解釈は (26a) の「雷雨」とは意味的な不整合は起こさないが、(26b) の「(大)雨」のような表現とは、その表現が意味的に内包する (中断のない) 継続性と不整合を起こし、不自然な文を生むということになる。

要点をまとめると、「が」格項に〈状況〉がきている場所アル構文を“実況”文として使うためには、「注目度」という第一の条件とは別の第二の条件として、問題の〈状況〉が変化や動きを持ち、継続性を強制されない (非継続的でありうる) ということがあることになる。((19) は (17b) や (21b) 同様第一条件は満たしうるが、(17b) や (21b) と違って第二条件は満たさない。) これは、実況放送というものの本来の性質を考えれば、きわめて自然なことであろう。このような条件を満たして初めて「あ

る」という「る」形で〈現在の事態〉を“実況”することができ、そうでなければ、〈未来の事態〉を表す非実況的な解釈が通例のものとなる。これはとりもなおさず、「が」格項に〈状況〉がきている場所アル構文が、一般的な非状態的な文と同様の振る舞いを示すということにほかならない。

なお、今まとめた第二の条件の「変化や動き」と「継続性を強制されない」というのは、実は別々の条件として区別されるべきものである。例えば「雹（ひょう）」は、「雷雨」同様に継続性を強制されないということは、(25)と(26)にそれぞれ対応する次の2つの例から分かる。

- (27) a. 一週間雹が続いている。  
b. このところ、毎日雹が続いている。

(27a)は「雷雨」を使った(25a)同様、毎日あらたに雹が降っているという反復的解釈が自然にできる。実際、(27b)のようにその反復的解釈を強制されても、(26a)同様、自然な文である。そして雹は雷雨同様、我々の生活に大きな影響(被害)をもたらすという点で、我々の関心を引く、注目に十分値する現象である。しかし雷雨とは違って、たとえ注目度が上がる文脈(上で見たコンテキストAやC)でも、次のような“実況”文は成り立たない。

- (28) \*見て！京都で雹がある。

これはなぜかという点、「雹」は「雷雨」とは違って、変化や動きを言語表現の意味として内包していないからであると考えられる。もちろん実際の自然現象としては、雹が降る短い時間の間に、降り方が強くなったり弱くなったり、雹の粒粒が目に見えて大きくなったり小さくなったりするという、変化はあろう。しかしそれは「雹」という言語表現自体が内包する意味ではなく、その外にある世界の問題である。この点が、雨のさなかに雷を伴うという変化を語自体の意味として内包している「雷雨」とは決定的に異なる。したがって、(28)は、第一条件の「注目度」も、第二条件の一方である「継続性を強制されない」というのも満たしうが、もう一方である「変化や動きの存在」を満たさないために、“実況”文として使えないということになる。(なお、(22b)の「\*見て！京都で豪雨がある」が“実況”として使えない理由も、今の「雹」の場合と同様の路線の説明が可能であろうが、議論は省略する。)

## 5. 「に」が不適切になる理由

これで、(17b)「見て！京都で雷雨がある」のような、「で」で表示されている場所(この例では「京都」)に、「が」格項が示す〈状況〉(この例では「雷雨」)を位置づけている場所アル構文が、「見て！」のような表現と共に起した時、どういう状況で、なぜ使えるのかの説明ができたことになる。それでは、(17b)が使えるのと同じような状況、すなわち実況放送的文脈でも、(17a)「\*見て！京都に雷雨がある」のように「に」は使えないということはどのように考えればよいだろうか。「見て！」がなければ「に」も問題なく使えることを考えると、これは一見不可解である。これは、「に」を位置づけの助詞として使う場合、位置づけられる「が」格項は〈個体〉だけでなく〈状況〉であって

もよいが、その場合の述語「ある」は、中右の言う過程述語ではあっても、とりわけ瞬間的な発生/起動局面 (inchoative aspect; cf. Smith (1997)) を表す局面動詞として解されなければならないということで説明できる。すなわち、この場合の「ある」は「起こる」や「発生する」などの局面動詞と共通する側面を持つということである。そうすると、(17a) と (17b) との対比は、次のような対比と基本的に同じということになる。

- (29) a. \*見て！ 京都に雷雨が起こっている。  
 b. (?) 見て！ 京都で雷雨が起こっている。

もともと「雷雨」は動詞「起こる」の「が」格主語にはなりにくいので、その意味では (29b) にも不自然さはあるが、それでも我々が問題にしてきたような“実況”文としては (29a) よりはるかに許容度が高い。これは、「起こる」が「に」と共に使われると、瞬間的な発生しか表さず、それゆえ「起こる」のテイル形である「起こっている」は (工藤 (1982) や庵 (2001) の言うテイル形の「記録」的解釈を考慮外におけば)、その瞬間的な発生の繰り返しという反復的な解釈しか許さなくなるからである。(29a) はしたがって、雷雨が起こっては止み、起こっては止むという反復的な状況を目で見た瞬間に“実況”するという事実上不可能なことを表し、不自然なものとなる。それに対し「で」の場合は、「起こる」をそのような瞬間的な発生と解釈することは強制されず、したがってテイル形にしても、反復的な状況を瞬間的に“実況”するという無理難題を (29b) が押しつけられることにはならない。ただ、今述べたように、もともと「起こる」は「雷雨」を主語としては取りにくいので、主語として自然な、たとえば「地震」で確かめてみよう。次のような例である。

- (30) a. \*見て！ 京都に地震が起こっている。  
 b. 見て！ 京都で地震が起こっている。

(30a) は、(29a) 同様、地震が起こっては止み起こっては止むといった発生の繰り返しという、瞬間的“実況”にそぐわない状況しか表し得ない。それに対し (30b) は、京都の街並みが地震で揺れているさなかの様子をテレビで見た話者が、見ていない者に対して“実況”する発話として申し分ない。

場所アル構文の場合に話を戻すと、「に」の場合、〈状況〉を「が」格項に持つ「ある」は瞬間的な発生局面を表すということから、次のような対比が生まれる。

- (31) a. きのう京都 {に／で} 短い時間豪雨があった。  
 b. きのう京都 {\*に／で} 長い時間豪雨があった。

(31b) の「に」の場合だけ許容度が落ちるのは、「に」が「ある」に対して強制する瞬時的な起動相の解釈が、「長い時間」という継続性を表す副詞と整合しないからである。同様の現象は、次のような文でも見られる。

- (32) a. きのお桜島 {に/で} 噴火があった。  
 b. きのお桜島 {\*に/で} 一日中噴火があった。

最後に、(23b)「見て！西の空 {で/ \*に} 稲妻がある。」で「に」が使えないのは、瞬間的な発生という起動相的解釈が「に」によって強制され、「ある」のようなル形では未来しか表せなくなるからである。

## 6. 終わりに

以上、場所アル構文を中心に、「が」格項に〈状況〉がきても、一般の予想に反して位置づけの格助詞として「で」だけではなく「に」も使うことができる例を出発点に、問題の構文の性質を考えてきた。特に、「ある」というル形で、未来でなく現在の状況を伝えることができるのは、“実況”的な場面に限られ、しかもその場合は「で」しか使えないことを見た。そしてなぜ「で」は使えても「に」は使えないのか、その理由を考えた。前節でも示唆したように、この理由を考えるには、出来事の局面／アスペクトの考察が不可欠であるが、「に」と「で」の選択とアスペクトとのより深い関係については、稿を改めて論じなければならない。

### 参考文献

- Hofmann, Th. R.・影山太郎 (1986) *10 Voyages in the Realms of Meaning*. くろしお出版.  
 庵 功雄 (2001) 「テイル形、テイタ形の意味の捉え方に関する一試案」『一橋大学留学生センター紀要』4. 一橋大学.  
 庵 功雄 (2012)<sup>2</sup> 『新しい日本語学入門 ことばのしくみを考える』, スリーエーネットワーク.  
 神尾昭雄 (1980) 「「に」と「で」—日本語における空間的位置の表現」『言語』9-9, pp. 55-63. 大修館書店.  
 工藤真由美 (1982) 「シテイル形式の意味記述」『武蔵大学人文学会雑誌』13-4. 武蔵大学.  
 Leech, Geoffrey N. (1987)<sup>2</sup> *Meaning and the English Verb*. Longman: London and New York.  
 Leech, Geoffrey N. (2004)<sup>3</sup> *Meaning and the English Verb*. Pearson, Longman: Harlow.  
 松村 明 (1957) 『江戸語東京語の研究』. 東京堂.  
 森田良行 (1980) 『基礎日本語 2—意味と使い方』. 角川書店.  
 森田良行 (1989) 『基礎日本語辞典』. 角川書店.  
 中右 実 (1998) 「空間と存在の構図」, 中右実・西村義樹『構文と事象構造』第I部, 研究社出版.  
 定延利之 (2004) 「モノの存在場所を表す「で」?」, 影山太郎・岸本秀樹 (編)『日本語の分析と言語類型: 柴谷方良教授還暦記念論文集』, pp. 181-198. くろしお出版.  
 Smith, Carlota S. (1997)<sup>2</sup> *The Parameter of Aspect*. Dordrecht: Kluwer Academic Publishers.  
 山田 進 (1981) 「機能語の意味の比較」, 國廣哲彌 (編)『意味と語彙』, pp. 53-99. 大修館書店.

(本学文学部コミュニケーション学域教授)